

時間の総合における「無」の機能

—サルトルの哲学と認知神経科学—

柴田健志

はじめに

サルトルは、『存在と無』のなかで「時間」に対する現象学的な説明をおこなっている。サルトルによれば、過去・現在・未来という時間の継起を作り出しているのは、意識のはたらきにはかならない。ただ意識だけが時間を作り出し、かつそれを生きることができると考えられるのである。このような主張の根拠とされているのは、「脱自 (ek-stases)」（Sartre 1943:165）という意識の構造である。サルトルによれば、「脱自」すなわち自己の外へ出るといふ構造が時間の継起を作り出す。

サルトルの現象学的時間論を読み直すにあたって私が着目したのは、現象学とは無関係に発展した、現代の認知神経科学の研究成果である。現象学的な時間論を支持するようなデータが、この先端分野から提供されているからである。サルトルの現象学的時間論の理解は、「脱自」という意識の構造が、存在の「無化」をとまなうという主張を、どのように理解するかにかかっている。この点を鮮明に認識した上で、私は、神経科学の最新の成果をもとに、サルトルの時間論を再構築してみた。以下

下の論考はその結果をまとめたものである。

1 瞬間と継起

サルトルの時間論を理解するための要所は、時間が継起であるとすれば、それを作り出すことができるのは「脱自」といふ構造に由来する意識のはたらきだけである、という主張にある。そこで、時間とは継起であるという理解が、意識のはたらきへと帰着する論理を明瞭にしながら、サルトルの主張を再構成してみなければならぬ。

電車の車窓から見える風景が次々と後方へ流れていくように、現在は次々に過去になっていく。サルトルは、この「継起 (succession)」（Sartre 1943:165）が時間そのものであるという。では、それがどうして意識を根拠にしていると考えなければならないのであろうか。この点を明確にするためには、継起の構造に注目すべきである。継起の構造において最も重要な点は、継起が「多」を前提することによってのみ成立するという点である。サルトルによれば、時間の単位となるのは、相互に独立した、不連続な「瞬間 (instant)」（Sartre 1943:166）でなければならない。それらの「多」が継起しているのである。

たしかに、サルトルのいうのとは逆に、もし時間が連続したものであったとしたら、同じひとつの時間が延々と続くだけで、その時間はけっして継起という形をとらないであろう。継起が「多」を前提するというのは、このようなことを意味している。

ところで、現在および過去という「瞬間」は、それ自体としては「無

時間的」(Sartre 1943:166) なるものである。なぜなら、時間とは継起であると考えられるが、それらの「瞬間」は継起の要素であるにすぎず、それ自体としてはいかなる継起も含んではいないからである。では、これらの「瞬間」から、いったいどうやって継起が作り出されるのであろうか。この点が問題である。この問題を概念的に表現し直すと、次のような形になる。すなわち、「多」の総合はいかにしておこなわれるのであろうか。

この場合、「瞬間」という「多」に対して、継起という形式が「外からあてがわれる」(Sartre 1943:168) と考えることはできない。なぜなら、そのように考えると、その継起という形式はいつどこから作り出されたのかと問わなければならないからである。むしろ、継起とは、それ自体はならん継起を含まない「瞬間」が、内的に総合されることで作り出されるものであると考えなければならないであろう。

そこで問題は次の点に帰着する。「瞬間」の総合とは、それらが「前後」(Sartre 1943:166) という順序によって結びつけられるということを意味する。このような順序を外からあてがうことができないとすれば、いったいそれはどこから生まれてくると考えられるであろうか。

この問いかけに対するサルトルの回答を検討するために、あえてサルトルの論述を少し離れ、今日が昨日になるといって、ごくありふれた事実注目してみよう。経験上、今日はかならず過ぎ去って昨日になる。では、なぜそうなるのであろうか。はつきりしていることは、明日がきた時点で今日はすでに昨日になっている、ということであろう。ここから、次のように主張することができる。明日がこなければ、今日はいつまでも昨日になることはない、と。ということは、今日が昨日になるのは明

日がくることによってである、と考えられないであろうか。今日が昨日になってから、それに続いて明日がくるというのではない。むしろ、まず明日がきて、それから今日が昨日として認められる、と考えなければならぬ。今日という日を完了させるのは明日なのである。

この点をもう少し概念的に考えてみよう。過去とはかつての現在である。しかし、現在はそのままでは過去とはならない。現在がもはや現在ではなくなるには、それを完了させなければならぬが、現在それ自体にはそれを完了させるものは何も含まれていない。では、現在はいつ完了したとみなされるのであろうか。現在は、それが現在である限りでは完了できないものである。現在が完了するには、現在の次にくる時制としての未来が必要になる。現在が完了し過去になるのは、未来が新しい現在として到来することによるのである。したがって、重要なのは、いかにして未来が到来するかである。現在が完了してから未来がやってくるとすれば、未来はいつまでもやってこない。むしろ未来の到来が現在を完了させるのである。すると、未来を到来させるには、いつきに現在から出てしまう必要がある。

このような現在からの脱出が、サルトルにとっても問題であった。サルトルはそれを「超出」の概念でとらえる。サルトルにおいて、時間の総合という作用の中心に位置するのは、現在から外に出るといって「超出」(depassement) (Sartre 1943:125-126) のはたらきにほかならない。では、「超出」とはいったい何のはたらきなのであろうか。サルトルによれば、それ自身の外へ出て行くというはたらきは、サルトルが「対自」と呼ぶ意識の存在に固有のものであって、サルトルが「即自」と呼ぶ事物の存在には見出されないものである。ようするに、時間の総合は意識の「脱

自」的構造に由来しており、したがって、時間とは、意識がそれ自身の存在を「時間化する (temporaliser)」（Sartre 1943:172）という形でのみ存在するものとみなされるのである。

以上をサルトル自身の言葉で要約しよう。

「ひとことといえば、『以前』とは、それが自己自身の『以前』にある存在である場合にしか理解されえない。言い換えれば、時間性は、自己の外において自己自身であるような存在の存在様態を指し示すだけである。時間性は自己性 (ipseté) という構造を持つていなければならぬのである」（Sartre 1943:172）。

つまり、「今」が「以前」となるには、自己が「今」から脱出し、「今」を置去りにしなければならぬというのである。これが、継起という視点から時間性を説明していったときに見出される、意識の「脱自」的な構造にほかならない。

ところで、意識は、それ自身が現在を「超出」していくはたらきを意識しているのだろうか。意識が意識それ自身のはたらきを意識していないということは、不可能であるようにみえる。それゆえ、「超出」のはたらきも意識されていると考えなければならぬ。しかしながら、もし本当にそうであるとすれば、意識が現在から外へ出たということにはならないであろう。というのも、現在から出る過程が継続的に意識されているのであれば、それは結局のところ現在の延長にすぎないと考えられるからである。むしろ、本当に現在から外に出たといえるのは、「気づいたら出ていた」といえるような場合である。つまり、「超出」と

いうはたらきは、それが意識のはたらきでありながら、意識の存在そのものを「無化」するものでなければならぬのである。

このきわめて重要な問題点を鮮明に認識するために、時間の総合の構造を現実的な意識の経験の次元においてとらえ直してみなければならぬ。

2 無化

サルトルによれば、時間性を作り出しているのは、「脱自」という意識の構造である。意識が現在の自己自身を未来の自己へと向けて「超出」し、自己の外へ出ることによってのみ、過去というものが成立する。これは次のようなことを含んでいる。現在の意識がそれ自身を「超出」することによって、その現在は完了し、かつてそうであったものという地位に置かれる、ということ。したがって、過去とはつねに「私」の過去であるほかない。

注目すべき点は、現在という時間は、「超出」されることによってのみ完了することができる、と考えられる点である。もし「超出」がなされなければ、いつまでも現在が続くであろう。なぜならそのような場合には、自己の存在にいかなる区切りも認められないからである。これに対し、自己の存在が「超出」によって区切られていくことで、過去・現在・未来という前後関係の下で自己の存在が継起しうると考えられる。

ということは、いったいどういうことになるのであろうか。現在の自己の存在がまず完了し、しかる後に新たな自己が存在を開始する、とい

うのではない、ということがここから帰結してくるであろう。順序はまったく逆なのであって、現在の自己がまず「超出」され、新たな自己が存在を開始することによって、ようやく現在は完了する、と考えられるのである。まだ存在しない自己の可能性に向けて、現在の自己が「超出」されない限り、現在は完了せず、したがって過去は存在しない。このように、過去・現在・未来という時間の総合は「超出」という「脱自」的なはたらしきを起点に成立していると考えられるのである。自己がそれ自身を次々に「超出」し、それ自身の存在を区切っていくにつれて、自己は時間のなかでその存在を生きることになる。

サルトルの時間性の論理をこのように読み直してみると、時間性とは完了と開始のくり返しによって構成されていると考えることができ。ただし、まず現在が完了し、それが確実に過去となった時点で、あらためて次の現在が開始される、というのではまったくない。なぜなら、もしそうであれば、意識の存在そのものには、じつは何らの区切りも生じていないと考えられるからである。現在が完了したことを意識が見届けた後、そこであらためて未来に向き直って何かを開始する、というのであれば、その間の意識はどう見ても連続していることになる。しかし、これでは時間の継起は作り出されることができない。継起は相互に孤立した「多」を前提するからである。

このように、時間の継起が作り出されるには、まず現在の「超出」がなされなければならない。ところで、事実として意識がつねに時間の継起を経験しているとすれば、絶えず現在の「超出」がなされ、存在が「瞬間」へと断片化されている、と考えなければならぬであろう。

さて、このように考えてみると、問うべき点は多少明瞭になったはず

である。まとめてみよう。意識の「脱自」的構造によって、過去・現在・未来という時間の総合が成立しているという、サルトルの時間論の要所を再構成してみた結果、「超出」が現在を完了させている、という主張が見出された。「超出」によって意識の存在が区切られることが、時間の総合が果たされる条件となっている、と考えられるのである。

ところで、「超出」によって意識の存在が区切られるということは、「超出」によって意識の存在がいったん「無化」されている、という意味である。存在に「前」と「後」が区別されるとすれば、それらは「無」によって区切られていなければならない、と考えられるからである。時間が経過するとき、意識はそれ自身の存在をいったん「無化」することによって、新たな生を開始していると考えなければならない。このように、意識の「脱自」的構造によって時間の総合が果たされるという、サルトルの時間性の論理が成立するには、「超出」が存在の「無化」をともなっているという論理が不可欠なのである。

この点は、サルトル自身によって明言されている。

「時間性は存在ではなく、それ自身の無化 (neantisation) であるような存在の内的構造であり、つまりは対自存在に固有の存在様態である」(Sartre 1943:178)。

意識の存在構造としての「脱自」の意味は、あるべき自己へ向かって、現にあるところの自己の外へ出るということである。サルトルによれば、そのように自己の外に出ることは、その時点での自己の存在を「無化」することなのである。では、「無化」とはいかなることであろうか。こ

の点に関して、サルトルの論述は決して明快であるとはいえない。そこで、サルトルの論述から少し離れ、サルトルが提示する事柄そのものについて考えてみよう。

くり返し述べたように、意識が意識それ自身を「超出」することによって、現在が完了し、過去が成立するとすれば、「超出」というのはたつきは新しい現在とかつての現在（過去）とのあいだに空隙を作り出す。しかしながら、意識は、新しい現在とかつての現在（過去）とのあいだにできたこの空隙を意識することはできないはずである。なぜなら、それを意識している意識が存在したとすると、その意識は連続的に存在していることになるが、そうなると、その意識にとってはもはや時間の経験はありえないことになるからである。

ということとは、いったいどういうことになるのであろうか。意識がこの空隙を意識できないということは、その間、意識が存在していないということと同義である。もし意識が存在しているなら、それが自己自身を意識しないということはありえない。ところが、この空隙が意識されると考えることはできない。したがって、この空隙は、まさしく意識の存在そのものの「無化」なのである。時間が「多」の総合であるとすれば、存在を断片化し、「多」を作り出しているのは、意識それ自身の「無化」すなわち非存在であるということになる。私の解釈によれば、これがまさにサルトルの主張していることである。

このように、時間の総合の起点である「超出」の根底には、意識それ自身の非存在が認められなければならない。それゆえ、もしサルトルが正しければ、意識は、いわば死と再生をくり返しながらひとつの生を生きていることになる。

では、「超出」という意識のはたらきが、意識それ自身の「無化」であるというパラドクシカルな主張を、いったいどのように理解すべきであらうか。

3 選択

考察すべき問題点を整理しよう。そのために、これまではあえて言及してこなかった「選択」というサルトルの用語を、ここで導入しなければならぬ。意識とは、あるべき自己へ向けてそれ自身を「超出」するものである。したがって、「超出」とは具体的にいえば「自己を選ぶ」(Sartre 1943:265) ことにならなければならない。ひとことではいえば、「超出」とは「選択」にはかならない。これまでの議論を踏まえると、あるべき自己を「選択」することによって、それまでの自己は完了し、過去の自己となる。時間が生きられるには、過去の自己と選択された自己は、非存在によって区切られていなければならない。では、意識はいつたどこで非存在へと移行するのであろうか。それは、「選択」のまったただ中においてでなければならないであろう。いや、「選択」こそが、意識を非存在へと導くのである。

しかし、注意すべき点は、このような非存在は、けっして意識されえないという点である。当然のことながら、意識には、その非存在を意識することはできないからである。したがって、意識の経験としてはこの「選択」は連続した時間のなかでなされていることになる。つまり、「選択」には、けっしてそれとは気づかれない仕方、意識それ自体の非存

在が潜んでいるということになる。

このようなパラドクシカルな事態を記述しようとしているために、サルトルの文章も、きわめて入り組んだものとならざるをえない。

「新たな選択は、それがひとつの終りである限りにおいて開始として与えられるし、それがひとつの開始である限りにおいて終りとして与えられている。選択は、二重の無によって限られている、そしてそのようなものとして、選択はわれわれの存在の脱自的統一の内に裂け目を実現しているのである。しかしながら、瞬間はそれ自体ひとつの無であるにすぎない。というのも、われわれがどこに視線を向けても、われわれはとらえるのは連続した時間化でしかないだろうからである」(Sartre 1943:511)。

この読みづらい文章を整理してみると、その主張の内容は、おおよそ次のようなことになるであろう。非存在としての「無」は、「超出」による新たな現在の開始であると同時に、それまでの現在の終了でもある。しかしながら、新たな現在の開始がそれまでの現在を終了させていると考えられるのは、現象学的な分析の結果としてであって、意識の経験においては、終了と開始はひとつの連続した時間のなかで与えられる。それゆえ、「選択」は終了である限りで開始であるともいえるし、また逆に開始である限りで終了であるともいえるのである。意識の経験においては、どちらであるかを決定することはできない。というのも、終了と開始を区切る「瞬間」があったとしても、それは意識それ自身の「無」であるがゆえに、意識によって経験されることができないからである。

サルトルの主張の内容が以上のようなものであるとすれば、けっして意識されることのない「瞬間」が、「選択」のなかで生じているのでなければならぬ。そのような「瞬間」が、時間の流れをわれわれの意識に経験させている、と考えられるのである。

このような論理は、たしかにパラドクシカルではあるが、けっして荒唐無稽な想定ではない。なぜなら、われわれは日常的な「選択」において、同様のことを経験しているからである。例えば、「もう出かけよう」と決心したときには、すでに選択は終わってしまっている。あるいは、メニューを見ながら「これを注文しよう」と決めたときには、やはり選択はすでに終わってしまっている。「選択」は「すでに選択した」という形でのみ意識されるのである。「選択」の直前までのことは、もちろん意識されている。それが現在という時間である。ところが、それに続いて生じているはずの「選択」それ自体は、不思議なことに意識から漏れているのである。われわれが意識しているのは、その結果にすぎない。

このように、「選択」の「瞬間」こそ、意識されない「無」であると考えられるのである。「超出」を「選択」と言い換えて考察してみたことの意味はここにある。

現代の神経科学は、まさにそのような「選択」の「瞬間」を実証的にとらえることに成功した。その研究成果に注目してみなければならぬ。

4 準備電位の理論

意志作用の神経基盤にかんするベンジャミン・リベットの実験は、哲

学の分野でもすでによく知られている。私が以下で援用するのは、リベットの実験を発展させた実験である。そのため、まずリベットの実験を概観しよう。

リベットの実験の意義は、意志と身体運動のあいだに想定されていた因果関係を否定するようなデータを提供した点にある。リベットによって否定された主張とは、身体運動は意志によって引き起こされたものである、という主張である。リベットにとって事態はまったく逆であって、意志こそ身体（脳神経）の活動によって引き起こされている、とみなされなければならないものである。

では、意志と身体運動の因果関係を逆転せうるような実験データとは、どのようなものであるだろうか。ごく簡潔に要約すれば、リベットがおこなった実験は次のようなものである（Libet 1985; Libet 1999; Libet et al. 1983）。

被験者は、「指でボタンを押す」という動作をおこなうよう指示されるが、いつボタンを押すかは被験者自身が決定できる。被験者はその行為をおこなった後で、自分がそれを決意した時点をも、時計を見て報告する。この間、大脳皮質の「運動前野」および「補足運動野」の電位が計測されている。また、電位が発生した時点およびボタンが押された時点が客観的に記録されている。（ボタンを押す決意の時点だけは主観的な報告である）。

実験結果からは、（１）ボタンが押される時点よりおよそ200ミリ秒前に「決意」がなされていること、（２）「決意」がなされる時点よりおよそ500ミリ秒前に「準備電位 (readiness potential: RP)」が生じていること、以上2点が明らかになっている。ここから、次のような結

論が容易に導き出される。

（１）だけに注目すれば、「決意」すなわち意志が身体運動を引き起こす原因であるように見える。しかし、（２）を考慮すれば、この主張は維持できない。なぜなら、「決意」のおよそ200ミリ秒後に発動する運動は、「決意」のおよそ500ミリ秒前からすでに準備されているからである。ということは、「決意」は原因というよりも、むしろ身体（脳神経）の活動が引き起こした結果にすぎないとみなしうるのである。

もし意志が本当に身体（脳神経）の活動を引き起こす原因であるとすれば、RPが発生する以前に「決意」が生じていなければならない。すなわちボタンが押される時点から測れば、そのおよそ700ミリ秒前に「決意」がなければならない。しかし実際には、「決意」は行為の直前になされており、そのさらに前に、行為へと延長される電位が発生しているのである。

以上が、リベットの実験の概要である。リベットの実際にはいくつもの批判が提出されたが、そのなかには時間に関する問題点の指摘が含まれていた。「決意」のおよそ500ミリ秒前にRPが発生しているということは、平均値としてであって、RPの発生から「決意」までの時間間隔は一定していなかった。原因とみなされる事象（RPの発生）と結果とみなされる事象（「決意」）とのあいだには、厳密には時間的な相関が成立していなかったのである。

リベットの主張を大筋で承認した上で、この点を改善する実験を試みたのがパトリック・ハガードである（Haggard 2003; Haggard 2005; Haggard 2008; Haggard & Eimer 1999）。ハガードは、自由意志の存在を否定するという目的をもつ、リベットの実験を洗練する過程で、「選択」

の「瞬間」を明るみに出すことに成功した。いうまでもなく、私が着目するのはこの点である。

リベットの実験の問題点を取り除く手段として、ハガードは「ボタンを押す」という行為に「選択」という段階を導入した。ハガードの実験においては、被験者は、右手の指でボタンを押すか、左手の指でボタンを押すかを自分で決定しなければならない。

左右の手を選択肢とした目的は次の点にある。左右の運動神経は脊髄で交差し、反対側の脳につながっていることが知られている。そこでハガードは、被験者の左右の脳の電位を別々に計測し、それらを比較することを試みた。すると、右手を選択した場合には、左脳のRPが右脳のRPを超える時点、左手を選択した場合には、逆に右脳のRPが左脳のRPを超える時点が特定された。それは、どちらの手を使用するかが決まった時点である。この時点では、まだ意識的な「決意」は生じていない。その時点を規準にとると、RPと「決意」とのあいだにははつきりとした時間的相関が成立することが明らかになった。

では、この実験結果をもとに、いったい何が主張できるであろうか。注目すべき点は、「選択」がなされた時点では、まだ意識的な「決意」がなされていないという点である。このことは、意志と行為の因果関係についての通念に反して、行為の「選択」は意志によってなされているのではなく、神経レベルで処理されている、ということを意味している(1)。したがって、意志とは「選択」することそれ自体を指すのではなく、「選択」の結果を意志することを指し示す言葉であるにすぎない。

この点を受け入れるとすれば、人間の意志とは、もはや「選択」そのものを支配する自由意志ではないことになる。実験の明示的な目的もこ

こにある。しかし、それと同時に、この実験は、「選択」の「瞬間」が意識にとつての「無」であるという点を示している。RPと「決意」とのあいだの500ミリ秒を、意識はけっして経験することができないからである。

驚くべきことに、この2点において、ハガードの実験は、まったく期せずしてサルトルの自由の哲学に実証的な根拠を与えるものになっている。事実、サルトルもまた自由意志の存在を何ら主張していない。サルトルにとって重要だったのは、意識が現在を「超出」して新たな存在を生きる、という点に人間の自由を見出すことであつた。

具体的な状況のなかで存在する意識にとつて、現在の「超出」とは、未来の「選択」でなければならない。それでは、「選択」とは何であろうか。すでに見ておいたように、「選択」とは意識が生きることでできない「無」である。意識は、「選択」が完了した後で、すでに「選択」された自己を生きることを決意するほかない。つまり、サルトルが「自由」という名称で指し示そうとしていたのは、現在という時間のなかで自由意志が「選択」を支配することではなく、むしろ「選択」が「無」によって現在から切り離されることなのである。

「自由は、その根底において、人間の核心に存在する無に一致する」(Sartre 1943:485)。

このような解釈によれば、サルトルの自由の哲学にとつて不可欠な点は、「選択」が「無」という「瞬間」のなかで果たされることにあつたということができる。(2)ここにおいてこそ、「意志よりも深い自由」(Sartre

1943(96)が見出される。そのような「瞬間」が存在するということが、自由意志の否定を目的として設定された、現代の神経科学の研究において実証されているのである。

おわりに

時間の流れを生じさせる「無」についての私の考察は以上である。時間論として出発したこの考察は、サルトルの主張する「無」の機能を掘り下げて、それを実証研究の成果とつきあわせてみることで、たんなる時間論の範囲を超えて、サルトルの哲学の根幹である「自由」に達した。無論、サルトルの哲学における時間性について考察し始めたとき、この点はすでに予測しうることであった。なぜなら、サルトルの自由の哲学の中心に「無」が位置することは、サルトル自身がくり返し強調していることだからである。

それと同じ「無」が、やはりサルトルの時間論の中心に位置している。「人間存在をそれ自身から引き離す無が、時間の源泉に存在する」(Sartre 1943:138)。

このように、サルトルの哲学において、「自由」の問題と時間の問題は、「無」において交錯している。人間は「自由」であるがゆえに時間を生きているのである。

文献

- Haggard, P. 2003, "Conscious awareness of intention and of action," Roessler & Eilan (eds.), *Agency and Self-Awareness issues in philosophy and psychology*, Oxford
- Haggard, P. 2005, "Conscious intention and motor cognition," *Trends in Cognitive Sciences*, vol.9 no.6, pp.290-295
- Haggard, P. 2008, "Human volition: towards a neuroscience of will," *Nature Reviews/Neuroscience*, pp.934-946
- Haggard, P. & Eimer, M. 1999, "On the relation between brain potentials and the awareness of voluntary movements," *Experimental Brain Research*, 126, pp.128-133
- Libet, B. 1983, "Time of conscious intention to act in relation to onset of cerebral activity (readiness-potential)," *Brain*, 106, pp.623-642
- Libet, B. 1985, "Unconscious cerebral initiative and the role of conscious will in voluntary action," *The Behavioral and Brain Sciences*, 8, pp.529-566
- Libet, B. 1999, "Do we have free will?" *Journal of Consciousness Studies*, 6, no.8-9, pp.47-57
- Sartre, J.-P. 1943, *L'Être et le Néant*, Tel/Gallimard

注

(一) 「これらの実験結果を総合すると、いくつかの選択肢のなかからひとつの行為を選択する過程は、哲学者たちによってしばしば『自由意志』の核であると考えられているものだが、それは自動的かつ無意識に作動するプログラム化された過程から結果するものでありうるという、興味深い可能性が示唆される。論理的に考察すれば、このことはまた、意識された意図が選択の『後から』生じているということを示唆している」(Haggard 2005:292)。